花　き

実　況

１　キク

奥越地区では、昨年 12 月 6 日にＪＡテラル越前キク部会研修会、12 月 15 日に「奥越地域キク生産者研修会」を開催し、45 名の生産者が参加した(写真 1)。

写真１　奥越地域キク生産者研修会

7 月植え寒菊は、12 月上旬の雪霜害で葉傷みがみられ、出荷不能となった。12 月 15 日が最終の出荷となった。

秋植えギクは積雪深が 60cm(大野市富田、1 月 15 日現在)程度で、昨年同時期が 47cm で、例年より消雪がやや遅い見込み。昨年度の出荷が 6 月 9 日であり、本年度は昨年よりやや遅れる可能性がある。夏秋ギク親株の古枝切りは 11 月 30 日、冬至芽の摘心作業は１月中旬から実施されており、1 月上中旬で大部分の株が終了した。病害虫は親株ハウスに黒さび、白さび病が中発生。

写真２　親株のトンネル保温

坂井地区では、夏秋ギク親株の冬至芽の摘心は行わず、トンネル被覆が行われている。草丈が 2～5cm(1 月 13 日)で、白さび病、黒さび病小発生。施設栽培の寒菊は、1 月まで断続的に出荷された(写真 2)。草丈 70～80cm (1 月 10 日現在)。

福井市東郷では、夏秋ギク親株として収穫後の切下株を 11 月にハウスに入れている。1 月下旬に台刈り予定。

丹南地区(越前町、越前市)では、夏秋ギク親株として昨年収穫後の切下株を昨年ハウスに植え込み、古株整理を昨年に行った。越前町では切下株整理は昨年の 12 月中下旬ごろに行った。

写真３　親株に罹病した白さび病

二州地区、若狭地区においては、冬至芽の発生はやや遅れている。小浜市の「冬一番」、「寒桜」、「新年の美」は年内に収穫終了した。

２　スイセン

スイセンの出荷ピークは、昨年同様 12 月上中旬となり、1 月 17 日現在 93 万本で昨年並みである。

1 月からは水仙まつりが各地で開催された。

３　ユリ

坂井市春江町のオリエンタルは、無加温２重ハウスで栽培された「シンプロン」、「カサブランカ」が 12 月下旬に出荷された。年末出しの「カサブランカ」、「シンプロン」のＬＡユリは一部収穫できず切残しがある。大野市のシンテッポウユリは、1 月 16 日に 12,000 粒播種された。

４　ストック

坂井地区ではアイアンシリーズ等が、福井、関西市場へ出荷されているが、開花がばらつき、年末まで 30～50 ケースの出荷で、12 月末までに 7 割が出荷された。1 月の価格は例年よりやや高い。病害虫では菌核病、半身いちょう病、灰色かび病が一部でみられる。

写真４　カルテットシリーズの開花始め

南越地区のカルテットシリーズは8月下旬播種が出荷ピークで、草丈 84cm(昨年 92cm、出荷終了)、9 月上旬播種が出荷始めで草丈 65～79cm(74～100cm、出荷始めから終り)、9 月中旬播種で出荷間近、56～64cm(55～78cm、出荷始め～)で昨年より開花が遅い(1 月 16 日調査、昨年 1 月 17 日調査)。

若狭地区では 9 月上旬播種のカルテットは開花が遅れており、1 月 16 日現在、収穫始め。10 月下旬播種のアイアン、カルテットは、草丈 6～8 cm葉数 10～12 枚となっている。9 月上旬播種のカルテットに、コナガ、ハイマダラノメイガが少発生。

５　その他

写真５　シンテッポウユリの播種

福井南部地区、永平寺町のハボタンは、12 月 11 日に目揃え会､12 月 11～27 日まで出荷｡出荷量 1 万 8 千本。昨年より発色が遅れたため全体的に遅れた。

越前市のトルコギキョウでは 9 月中旬に播種された「ボヤージュグリーン」、「一番星」が 11 月 8～20 日に定植された。ビニールトンネル被覆が行われている。8 月咲の作型はは種を 1 月に行う予定である。あわら市のトルコギキョウは、「ロベラ」、「レイナ」シリーズが 8 月上旬に定植され、台刈りが行われている。

対　策

１　８、９月咲きギクの親株管理と採穂

１）８月咲きの「小鈴」等生育が悪く、芽立ちが悪いなどの場合、１月下旬から２月上旬にかけて、地際部より3～5cm（葉３、４枚）を残して冬至芽の摘芯を行う。芽立ちのよい品種では地際部で、芽立ちの悪い品種は地際からやや上がった部位で一斉に摘心（刈り込み）する。

２）挿し穂は摘心をしないで冬至芽をそのまま利用すると、心止まり症状や生育開花が

不揃いとなる。また、夏ギクは親株時に高温に遭遇すると挿し穂苗の開花が早まるため、ハウス内が高温にならないように換気の励行を行う。

３）作業時期目安

作　型	定植日	仮植期間	挿し芽日	冬至芽摘心日
仮植育苗の８月咲きｷﾞｸ	4/15	3/25～4/14 摘心4/1～4/5	3/11 15℃温床育苗	1/25～2/ 5
８月咲きｷﾞｸ	4/15	－	3/26	2/ 5～2/15
９月咲きｷﾞｸ	5/15	－	4/30	3/10～3/20

※仮植育苗は8月咲きの山手白、広島紅、夏晴などの旧盆に間に合わない品種に利用する。

４）採穂が挿し芽適期より早い場合は０～２℃で貯蔵する。貯蔵する場合は、採穂２、３日前に殺菌剤を親株に散布する。

５）採った穂は調整後に日の当たらない納屋等で広げて乾かす（採穂時の70～80％の水分含量、少し萎えた程度とする）。乾いていないと冷蔵中に穂の曲がりや腐敗が多くなる。

６）穂を冷蔵する場合は冷蔵前に穂を調整し、切り口を下にして並べておく。

穂は乾いた新聞紙に包み、切り口を下にして、30×40cmのポリ袋に200本程度ゆったりとして入れる。完全に密封せず、切り口を下にしてダンボール箱に詰めて貯蔵する。袋の中が蒸れている場合は、乾いた新聞紙を入れ水分調整を行い、３～４日後に新聞紙を取り出す。挿し穂は、冷蔵後挿し芽時まで切り口はそのまま下にしておく。

２　親株の病害虫防除

１）　苗による本圃への病害虫の持込みを防ぐため、病害虫の防除を徹底する。
新芽の伸長が始まってからは、週１回の防除を励行するとともに、晴れた日には十分に換気し、白さび病等の病害発生を抑制する。

２）　散布は晴れた日に行い、夜間までに植物体に散布した薬液が乾燥していることがのぞましい。

３）　床と通路へのモミガラマルチにより、土壌水分を保持し、灌水回数を減らす。

白さび病が発生していない親株は、ジマンダイセンフロアブルやコロナフロアブル、ステンレスなどを週１回定期散布する。発病している場合は、病斑（冬胞子堆）のついた葉を取り除いてからチルト乳剤25(EBI)、ピリカット乳剤、ストロビーフロアブル等の治療剤を散布する。感受性が低くなった（効果が低くなった）薬剤は使用しない。また、効果がある薬剤であっても、同系統剤の連用で効果が低下しないように、異なる系統剤をローテーションで散布し、同じ薬剤や同系統剤をしばらく使用しない。

写真６　親株についた黒さび病

親株搬入時に黒さび病がみられた場合は、罹病葉を

除去し、ステンレス等を早い時期に散布する。摘心後の新茎葉への感染を抑制するため、新シュートが出始めたステージ以降、週1回予防剤を散布する。

3　トルコギキョウの育苗管理

1）播種から子葉展開後まではしっかり灌水する。本葉が展開するまでは、乾燥させないようにする。

2）晴天時は乾燥しやすいので、ミスト灌水の場合はこまめに散水し、用土表面の乾燥に注意する。底面給水では、過湿になりすぎないように、過剰な水を排水できるようにしておく。灌水は日中の暖かいときに行い、冷たい水を灌水して根を冷やさないようにする。

3）空中湿度が低いと苗（葉）がなかなか大きくならない。温風暖房機等で加温している場合は、床への灌水等により湿度を保つように工夫する。

4）発芽後、本葉が重なると軟弱徒長や病害の原因になるので、苗の生育状態に応じて、早めに間引きする。

5）定植した苗については、過湿圃場では接地面から白絹病が発生するため、表土が過湿にならないよう心掛ける。

6）県内の冬季の日照は、トルコギキョウの生育にとって十分でないため、トンネル被覆等を行っている場合は、光が十分あたるように留意する。

4　スイセンの開花後の管理

1）　露地の栽培で12月にそさい5号を20g/㎡施用した圃場には、2月上旬にそさい5号を20g/㎡施肥する。

2）12月に施肥を行ってない圃場では、消雪後、2月上旬にそさい5号を40g/㎡施肥する。水が入る圃場では、排水対策を徹底し、2月上旬と中旬に分肥してもよい。畝間に水が停滞しないように、排水対策もしっかり行う。

3）ハウス栽培で12月にそさい5号を20g/㎡を施用した圃場には、切り花採花後の球根を肥大させるため、そさい5号を2月上旬までに20g/㎡施肥する。12月に施肥を行ってない圃場では、2月上旬までにそさい5号を40g/㎡施肥する。ハウスの温度管理は、10℃～25℃の範囲で管理する。

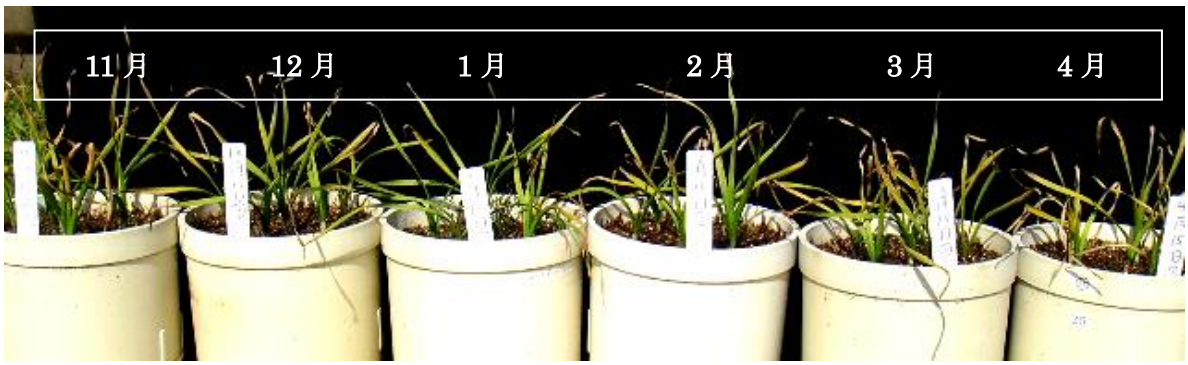

写真７　施肥時期と球根堀上期の地上部生育
年明け後の施肥効果は低下する傾向がある。